

東京外国語大学附属図書館 第19回特別展示

台湾フィールド言語学

浅井恵倫の調査資料から



平成30年11月19日(月)～12月26日(水)

会場：東京外国語大学附属図書館2階ギャラリー

開館時間：平日 9:00～21:30 土日 13:00～18:30

協力：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 既形成拠点 GICAS



1. はじめに

言語学の一分野である「フィールド言語学」において、フィールド言語学者（言語調査者）は参考になる文献等の無いような未知の言語をゼロから研究する。言語調査者はある地域に赴き、現地の人々と信頼関係を築きながら、現地の人々の話す母語、それもほとんど知られていない言語や消滅の危機に瀕する言語の調査を行う。そして、対象言語の文法体系を研究し、言語の記録・保存に寄与することを目的とする。

本展示では、台湾においてフィールド言語学を实践した先駆的言語学者としての浅井恵倫を取り上げ紹介する。

2. 浅井恵倫と言語学

台湾が清朝から日本の統治に替わった西暦 1895 年、浅井恵倫は石川県小松市に生まれた。東京帝国大学文科大学において言語学を修め、言語学科を卒業後学校教諭になる。1922 年ごろ、単身台湾離島の紅頭嶼（現在の蘭嶼）に赴き、マラヨ・ポリネシア語派に属するヤミ語のフィールド言語調査を行っている。その後、大阪外国語学校教授になってからも休暇を利用して台湾へ赴き、山岳地帯のセデック族集落でフィールド言語調査を行った。この調査に基づきヤミ語の研究論文を著わし、1936 年にオランダ国立ライデン大学文科大学の博士号を取得した。

1936 年 5 月から、台湾先住民諸語研究の先駆者である小川尚義（後述）の後任として、台北帝国大学（現在の国立台湾大学）に勤務し、台湾先住民の言語の研究に従事する。台湾赴任に先立つ 1935 年には、小川尚義との共著『原語による台湾高砂族伝説集』を著わしている（高砂族とは台湾先住民のうち、特に山岳地帯に居住する人々を指す）。また、急速に漢民族化しつつあった平埔族（平地に居住する台湾先住民）の言語—バサイ語、カバラン語、シラヤ語など—を記録するために台湾各地を奔走した。

終戦後日本に戻ってからは東京大学、国立国語研究所、金沢大学などで講師となった。1969 年に亡くなるまで勤めたのが南山大学であり、浅井の残した資料の一部が同大学の人類学研究所に収められている。

浅井が研究対象とした言語は台湾先住民諸語にとどまらない。また、彼の研究範囲も言語学にとどまらない。南洋、ニューギニア、ベトナム、ラオス、カンボジア、タイなど、さまざまな地域の言語・民俗・文化を調査した。ただ、台湾以外の地域の資料は現在も整理されることなく、浅井コレクションの一部として眠っている。¹

¹ ここまで土田（1970, 2005b）などを参照した。



3. 台湾先住民諸語研究の流れにおける浅井恵倫

台湾には古くから先住民が暮らしてきた。彼らには固有の言語があり、その数は20を超える。これら全ての言語はフィリピンの諸言語やインドネシアの諸言語と同一のオーストロネシア語族に属する。とりわけ台湾先住民の言語はこの語族の古風な特徴を留めているため、この語族は台湾を起点として広がっていったと考えられている。台湾はオーストロネシア民族の歴史を辿るうえで最も重要な土地であると言ってよい。

台湾先住民の言語は他のオーストロネシア諸語に比べて研究が遅れていた。台湾先住民諸語が研究者の注目を集め始めたころ、平地に住む先住民の多くは漢民族化により固有の言語を失いつつあった。また、山地に住む先住民には首狩りの習慣があり、部外者を拒み続けていた。台湾先住民の言語の研究が本格的に始まるのは、台湾が日本統治時代(1895-1945)に入ってからのことである。

日本統治時代に始まる、日本人学者による台湾先住民の言語の研究は、オーストロネシア言語学の中でも重要な位置を占めていた。これら台湾先住民の言語研究の代表とされる3人の学者がいる。小川尚義(1869-1947)、浅井恵倫(1895-1969)、土田^{しげる}滋(1934-)である。この3人には、時代は異なるものの東京大学で言語学を学んだという共通点があるのが興味深い(小川は帝国大学文科大学博言学科、浅井は東京帝国大学文科大学言語学科、土田は東京大学人文学研究科)。そして3人とも、台湾先住民の言語全般にわたって、フィールド言語調査を行った。

年代的に小川と土田の中間に位置する浅井恵倫は、小川、土田の両者と面識があった。小川は1920~1930年代にかけて、台北帝国大学言語学研究室において台湾先住民諸語の研究に従事していた。小川が台湾を去った後、同研究室の後継者になったのが浅井である。浅井は小川尚義の膨大な研究資料を引き継いだ。そして浅井が他界したのち、土田が小川・浅井の研究資料の整理に当たった。台湾の日本統治時代前期に活躍したのが小川であり、その後期に活躍したのが浅井であった。そして戦後、彼らの研究は土田に引き継がれた。浅井は台湾先住民の言語研究において小川と土田の架け橋の役割を果たしたことになる。

4. 小川尚義・浅井恵倫旧蔵資料

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(以下、AA研)には「小川尚義・浅井恵倫旧蔵資料」が収められているが、この資料には小川・浅井・土田にまつわる経緯がある。

4.1. 小川尚義の資料

「小川尚義・浅井恵倫旧蔵資料」に収められているのは、小川尚義が自ら台湾先住民諸語を調査した際のノート、小川自身が執筆した研究論文、小川が研究のために収集した論文、



小川が収集した台湾先住民に関する手稿（小川以外の人物によるもの）、小川が台湾に関する文献を写した抄本などである。これら小川の収蔵物は膨大な量であったと想像される。これらの多くは小川が台北帝国大学を辞する際に浅井に受け継がれたが、一部は小川文庫として国立台湾大学に収められている（国立臺灣大學 2011）。

4.2. 浅井恵倫の資料

浅井も小川と同様、台湾においてフィールド言語調査を行い、調査ノート、研究論文、音源資料など膨大な資料を残した。小川と浅井が台湾を起点に行った調査資料のコレクションが、この「小川尚義・浅井恵倫旧蔵資料」の内容である。

浅井は台湾で終戦を迎える。しかし、日本に帰国するに当たってこれら膨大な資料を持ち帰ることは許されなかった。そこで浅井は知人のアメリカ人に依頼し、資料を一旦アメリカに輸送してもらうことに成功した。そして日本に戻ってから、アメリカから日本へ再郵送を願う手紙を送っている。ただ、林（2012:623）に簡単な記載があるのだが、全ての資料が浅井の手元に戻ってきたわけではなく、一部返却されない資料があった。これらは、清水（2017）によれば、煙管や帽子、弓矢といった民俗学的な文物コレクションであり、現在はアメリカ自然史博物館に収められている。

アメリカから浅井の手元に戻ってきた「小川尚義・浅井恵倫旧蔵資料」は、一部が浅井の勤務先であった南山大学に、残りが平塚にあった浅井の自宅に置かれていたらしい（土田 2005b）。浅井の他界後、南山大学に残った資料は南山大学人類学研究室が収蔵することになった。一方、浅井の自宅にあった資料は、土田滋が当時勤めていた AA 研が買い取るようになった。こうして現在、「小川尚義・浅井恵倫旧蔵資料」の行きついた先は三か所ある。南山大学人類学研究所、AA 研、そしてアメリカ自然史博物館である。

4.3. 目録の公開と資料の現在

南山大学人類学研究所と AA 研に所蔵されている資料は、土田滋らが分類・整理を進め、2005 年に『小川尚義浅井恵倫台湾研究資料』として、その目録が公開された。現在では、目録番号をもとに資料を請求し、研究などに利用することができるようになっている。ただし本書が目録化したのは、小川・浅井の資料のうち台湾に関するものに限られている。²

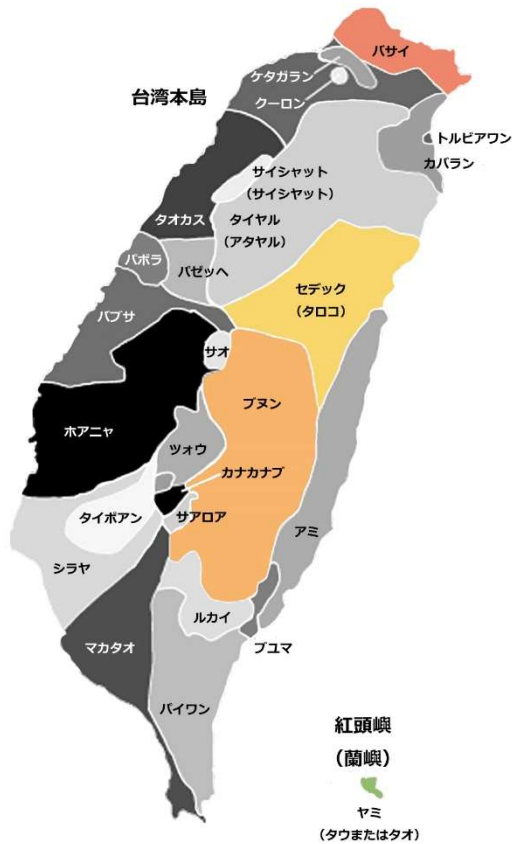
今回の展示は、浅井恵倫の台湾先住民諸語研究に焦点を当てる。「小川尚義・浅井恵倫旧蔵資料」から、浅井がフィールド言語調査の産物として残したノートや録音資料などを紹介するほか、浅井の出版物、講演資料なども展示する。

浅井が他界してほぼ 50 年が経った。彼の研究、彼の残した貴重な資料がこのまま時間の流れとともに忘れ去られてしまうのはあまりに惜しい。この機に浅井恵倫という人物の、フィールド言語学者としての仕事とその成果に触れてほしい。

² AA 研が所蔵する浅井の旧蔵書については「浅井文庫」として整理され、東京外国語大学附属図書館 OPAC（<http://www-lib.tufs.ac.jp/opac/>）に登録されている。



5. 台湾先住民諸語



■18世紀の原住民の言語分布図

<http://www.gicas.jp/taiwan/> 掲載の図を基に作成

台湾本島の東南に位置する離島、紅頭嶼（現在の蘭嶼）におけるヤミ語を除き、台湾先住民の言語は台湾オーストロネシア諸語 (Formosan languages) と総称される。台湾オーストロネシア諸語は、オーストロネシア語族の中で最も古い特徴を持つとされる言語群である。オーストロネシア諸語の分布域は、北は台湾、南はニュージーランド、東はイースター島、西はマダガスカルに至る。太平洋とインド洋をまたがる島嶼部を中心に広大な範囲で話されている語族である。台湾におけるオーストロネシア諸語は二十数言語あるとされているが、平地またはその近隣の山々において話されていた言語の多く（シラヤ語、ホアニャ語、バブザ語、タオカス語、パゼッヘ語、バサイ語、ケタガラン語、サイシャット語、サオ語、カナカナブ語、サアロア語、カバラン語など）は著しい漢民族化のため、日本人研究者が本格的に調査を始めた20世紀初頭にはすでに消失したか消失の危機に瀕している状態であった。一方、山地や東海岸沿いに分布する言語（アタヤル語、セデック語、ブヌン語、ツォウ語、ルカイ語、パイワン語、プユマ語、アミ語）と離島のヤミ語は現在も用いられている。

「語族」とは、ひとつの祖先言語—祖語—からいくつかに分岐した言語群を抱える言語の家系のことである。台湾オーストロネシア諸語は、その古風な特徴ゆえにオーストロネシア祖語から最も早く分岐した言語群と見なされ、またオーストロネシア民族は約5,6千年前に中国大陆から台湾へ渡ってきたとされている。台湾という土地は、オーストロネシア民族がそこで分岐し、さらに南の島々へと移動していった起点と考えられ、この島における言語史がオーストロネシア語族全体に与える影響の大きさは測り知れない。台湾という島の最大の魅力は、台湾先住民、そして彼らの話す古風な言葉とっていいだろう。

古さの点では台湾オーストロネシア諸語に匹敵するとされるもう一つの語派がある。フィリピン、インドネシアなど主に太平洋の島嶼部に分布するマラヨ・ポリネシア語派である。紅頭嶼（蘭嶼）で話されるヤミ語は、言語の系統上マラヨ・ポリネシア語派に属すが、ここでは、系統の別にかかわらず台湾の領土内で用いられるオーストロネシア諸語を「台湾先住民諸語」と呼ぶことにする。



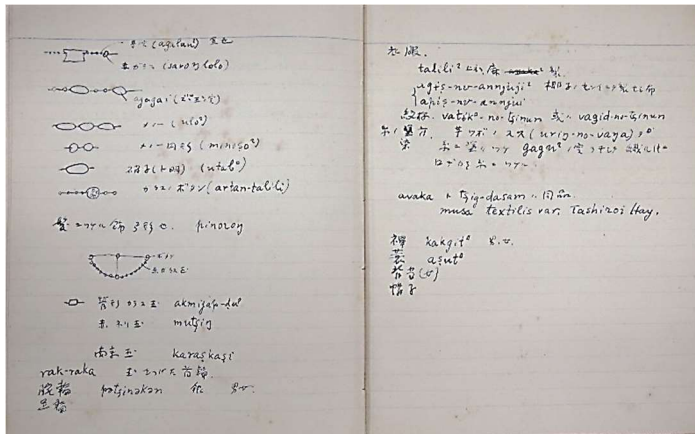
6. 展示：浅井の台湾先住民諸語研究の時間軸に沿って

6.1. ヤミ語

① A study of the Yami language: an Indonesian language spoken on Botel Tobago Island

浅井が1936年にオランダのライデン大学で博士号を取得したときの論文である。その当時ほとんど知られていなかったヤミ語（マラヨ・ポリネシア語派）について研究した。この論文には東洋史学者の石田幹之助（1891-1974）が書評を寄せている。³

② ヤミ語に関する民俗誌ノート：0A279⁴



1921年頃から数回に渡り、浅井は恐らく初めてのフィールド言語調査を台湾本島の東南に位置する離島、紅頭嶼（蘭嶼）において行った。この島で話されるヤミ語を調査した際のノート。

[自筆ノート：装飾品の語彙を図入りで記入した頁]

③ 台湾ヤミ族、涼台（タガカル）前に立つ男女と浅井恵倫教授（三尾・豊島2005:191）

④ 「紅頭嶼土人の暦組織」⁵

ヤミ族がどのように一年の周期に名称を付けるかを述べた論文。太陰暦と太陽暦の組み合わせを用い、1年を12か月に分割しそれぞれに名称を与えている。閏には13か月になる。月には30の日があり、一日一日に名称がある。

³ 石田幹之助（1936）[書評] Asai Erin, *A study of the Yami language: an Indonesian language spoken on Botel Tobago Island*, Leiden: Universiteitsboekhandel en Antiquariaat J. Ginsberg, 1936, pp.95, errata. 『文化人類学』2(2):523-525.

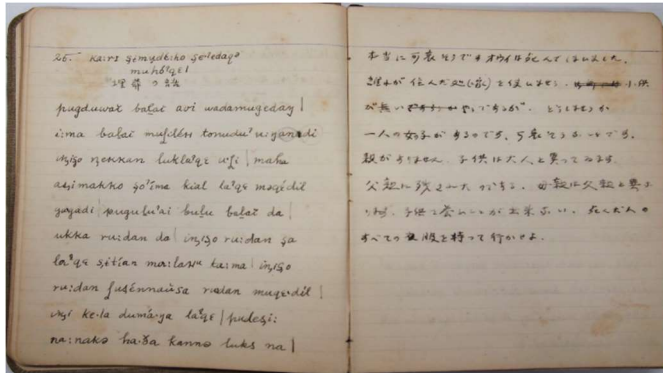
⁴ 0Aから始まる記号はAA研所蔵の「小川尚義・浅井恵倫旧蔵資料」を表し、三尾・豊島（2005）中の目録番号を指す。

⁵ 浅井恵倫（1939）「紅頭嶼土人の暦組織」『台湾総督府博物館創立三十年記念論文集』: 235-245. 台北:台湾総督府博物館内, 台湾博物館協会. 展示品は1939年3月30日発行の別刷。



6.2. セデック語

⑤ Sedeq 単語リスト及びテキスト : OA251



[自筆ノート：左上の見出しに「埋葬の話」とある]

浅井がヤミ語の次にフィールド言語調査を行ったのがセデック語である。1927年夏に台湾の山岳地帯を訪問した際のノート。この頁では談話資料を収集し、左にセデック語の表記、右に日本語の対訳を記している。

⑥ 糸を撚る原住民女性と犬(霧社地区のタイヤル族かセデック族) (三尾・豊島 2005:198)

⑦ The Sedik language of Formosa⁶

浅井がセデック語の調査成果をまとめた書籍。本書とほぼ同一の内容の論文が「Some observations on the Sedik language of Formosa」という題目で1934年に発表されているが⁷、論文の方には浅井の撮った写真も挿入されている。

⑧ セデック方言に関する比較単語リスト : OA244

FOREIGN WORDS		PHONETICIZATION	PAGE	JAPANESE	FOREIGN WORDS		PHONETICIZATION	PAGE	JAPANESE
豆	kappal	kappak		豆	kappal				
指(上)	keshi	keshi		指(上)	keshi				
指(下)	ku	ku		指(下)	ku				
丸	gugut	gugut		丸	gugut				
空	kuru	kuru		空	kuru				
水	bali	bali		水	bali				
門	koti	koti		門	koti				
手	domani	domani		手	domani				
血	dava	dava		血	dava				
汗	me'riy	me'riy		汗	me'riy				
肉	ru'sokk	ru'sokk		肉	ru'sokk				
足	yug'gul	yug'gul		足	yug'gul				
足	halu'das	halu'das		足	halu'das				
股	putsaq	putsaq		股	putsaq				
足	do'req	do'req		足	do'req				
足	koti	koti		足	koti				
足	do'req	do'req		足	do'req				

浅井がセデック族集落群のうち3つまたは4つの集落で収集した基礎語彙の形式を表にしたノート。各集落における単語の形式を比較し、各方言の特徴を分析しようとしたことが窺える。

[自筆ノート：身体の部位等についての単語が並んでいる頁]

⑨ 浅井恵倫教授と原住民男性達(タイヤル族かセデック族) (三尾・豊島 2005:226)

⁶ Asai, Erin (1953) *The Sedik language of Formosa*, Cercle Linguistique de Kanazawa, Kanazawa University.

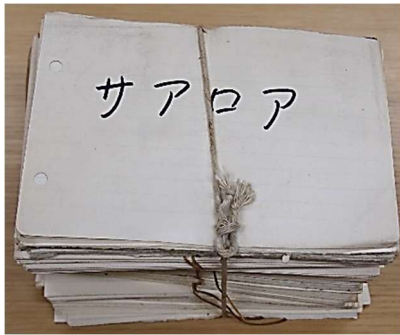
⁷ Asai, Erin (1934) Some observations on the Sedik language of Formosa 『東洋学叢編』 1:1-84. 大阪静安学社編. 東京:刀江書院.



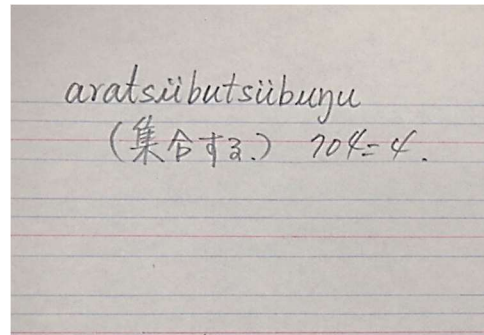
6.3. ブヌン語・サアロア語ほか山地先住民族の言語

⑩ 自筆カード束 (サアロア語)

フィールド言語調査により収集したサアロア語の単語一つ一つを、カードに書き入れたものの。この作業は辞書作りに向けての第一歩となる。また、分析に必要なカードだけを抜き出して比較することで文法研究などにも活用できる。



[サアロア語自筆カード束]



[サアロア語自筆カードの1枚]

⑪ 『原語による臺灣高砂族傳説集』

小川尚義と共著の本書は、日本統治時代における台湾先住民諸語研究の最高峰と評される(ただし平埔族の言語は除外)。浅井が担当した言語はセデック語、ブヌン語、ルカイ語、ツォウ語、サアロア語、カナカナブ語、ヤミ語である。

⑫ 粟束を担ぐ原住民男性 (パイワン族) (三尾・豊島 2005:197)

6.4. バサイ語ほか平埔族の言語

⑬ バサイ語歌謡のレコード

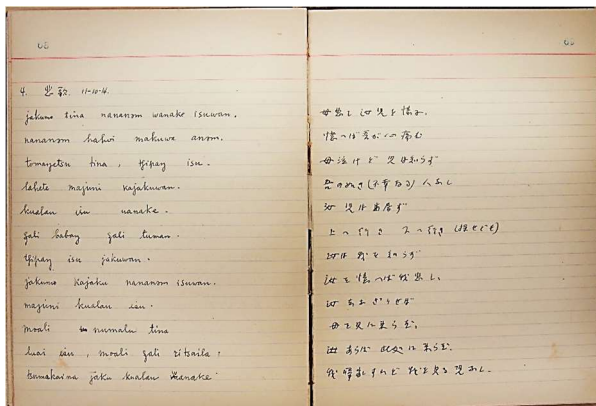
浅井が録音し、のちにレコードとして作成されたバサイ語歌謡の音源資料。浅井は当時残り少なかったバサイ語話者の高齢の女性を調査協力者とし、バサイ語の語彙、歌謡などの収集を行った。



[バサイ語歌謡のレコード: 「ÉTOILE」(エトワール:フランス語で「星」の意)は京都にあった福永レコードプロダクションのレーベル]



⑭ 基隆郡新社の単語資料：0A036



基隆郡新社とはバサイ族の集落名。台北帝国大学で研究に従事するようになってからの浅井は、消滅の危機に瀕していた平埔族の言語の記録・保存に力を入れた。このノートはバサイ語の歌謡を書き取り、日本語の対訳を付けたもの。

[自筆ノート：左上に「悲歌」とタイトルがある]

⑮ 荷を頭に担ぐ女性（浅井の写真コレクションから）

⑯ 一服する平埔族の女性（浅井の写真コレクションから）

6.5. 平埔族の言語—その後

⑰ 「台湾平埔族諸語比較語彙 第一部：台湾中西部諸語」

小川や浅井らが収集した平埔族の語彙集は手つかずのままであったが、土田滋が1982年にタオカス語、パポラ語、パプザ語、ホアニャ語、パゼッへ語などの資料をまとめ論文として発表した。⁸

⑱ 『臺灣・平埔族の言語資料の整理と分析』

本書はシラヤ語の語彙集とバサイ語の語彙集から成る。⁹ 前半は主に小川の資料、後半は浅井の資料を基に、後代のオーストロネシア諸語の研究者、土田滋、山田幸宏、森口恒一が編纂した。

⑲ Texts of the Trobiawan dialect of Basay¹⁰

終戦により日本人研究者は台湾を去り、以後主に漢族の研究者が台湾先住民諸語研究を担うこととなる。本書はその代表とも言える李壬癸が浅井のバサイ語の資料（歌謡と歌詞に対する注釈、歌詞の翻訳等）を基に編集したもの。

⁸ Tsuchida, Shigeru (1982) A comparative vocabulary of Austronesian languages of sinicized ethnic groups in Taiwan, part I. West Taiwan. *Memoirs of the Faculty of Letters, University of Tokyo* 7:1-166. Tokyo: Faculty of Letters, University of Tokyo.

⁹ Tsuchida, Shigeru, Yukihiro Yamada, and Tsunekazu Moriguchi (1991) *Linguistic materials of the Formosan sinicized populations I: Siraya and Basai*. Tokyo: The University of Tokyo, Linguistics Department.

¹⁰ Fuchu, Tokyo : Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, 2014



- ⑳ 手を繋いで踊る、漢族風の上衣を着た男女（平埔族）（三尾・豊島 2005:241）

6.6. 台湾先住民諸語一般

- ㉑ 「台湾言語学はどこまで進んだか？」¹¹

「Contributions of Japanese linguists to the study of the Indonesian languages of Formosa」(直訳：台湾オーストロネシア諸語における日本人言語学者の貢献)という英文タイトルが内容を的確に表している。文献表には簡潔な注釈もあり参考になる。

- ㉒ 「台湾蕃族は何処から来たか」

浅井が1930年11月5日大阪毎日新聞社において講演した際の草稿。台湾先住民の分類について、漢民族化の度合い、身体的特徴、文化的特徴などから検討し、さらに言語学の観点からオーストロネシア諸語としての特徴を語った。

- ㉓ 和装の浅井恵倫教授と犬（三尾・豊島 2005:191）

7. おわりに

台湾先住民と彼らの言葉にさらに関心を持たれた方に向けて、これまでに行われた台湾先住民に関する展示と、台湾先住民研究の入門書を紹介する。

2005年、AA研において「臺灣資料：テキスト・音・映像で見る台湾～一九三〇年代の小川・浅井コレクションを中心として」という展示並びに一連のイベントが行われている。この展示の概要はウェブサイト <http://www.gicas.jp/taiwan/> で見ることができる。

それより早い1994年には、国立民族学博物館において「台湾先住民の文化—伝統と再生—」という題のもと、瀬川孝吉（1906-1998）が収集した台湾先住民関連の資料（瀬川コレクション）の企画展が行われた。現在ではこの展示に際して出版されたパンフレット（松澤1994）で当時の様子を知ることができる。

導入書としては、『台湾の民族と文化』（宮本・瀬川・馬淵 1990）、『台湾原住民研究への招待』（日本順益台湾原住民研究会 1997）などが挙げられる。

¹¹ 浅井恵倫（1954）「台湾言語学はどこまで進んだか？」『民族研究学』18/1-2:12-19.



参考書目

■ 図書・論文

- 国立臺灣大學（2011）『国立臺灣大學圖書館小川尚義文庫目録』臺北市：国立臺灣大學。
- 清水純（2017）「1947年、浅井コレクション渡米の経緯：アメリカ自然史博物館における台湾原住民収蔵品をめぐる一考察」『台湾原住民研究』21:38-79.
- 土田滋（1970）「故浅井恵倫教授とオーストロネシア言語学」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』10：2-4.
- 土田滋（2005a）「浅井音源資料の整理」『小川尚義浅井恵倫台湾資料研究』247-269. 府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 土田滋（2005b）「(再録) [人と学問]浅井恵倫」『小川尚義浅井恵倫台湾資料研究』322-339. 府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 日本順益台湾原住民研究会（編）（1997）『台湾原住民研究への招待』東京：風響社.
- 松澤員子（編）（1994）『台湾先住民の文化—伝統と再生—』吹田：国立民族学博物館.
- 三尾裕子・豊島正之（編）（2005）『小川尚義浅井恵倫台湾資料研究』府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 宮本延人・瀬川孝吉・馬淵東一（1990）『台湾の民族と文化』東京：六興社.
- 林初梅（2012）「言語学者・小川尚義とその時代」林初梅（著）『小川尚義論文集復刻版』585-629. 東京：三元社.

■ ウェブサイト

- 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所. 「臺灣資料：テキスト・音・映像で見る台湾～一九三〇年代の小川・浅井コレクションを中心として」
<http://www.gicas.jp/taiwan/>（参照 2018-11-16）.

『台湾フィールド言語学—浅井恵倫の調査資料から—』

発行日 平成30年11月19日
展示解説 落合 いずみ 日本学術振興会特別研究員 PD（神戸市外国語大学）
編集・発行 東京外国語大学附属図書館
住所 東京都府中市朝日町 3-11-1

展示資料一覧

No.	タイトル	編著者等	出版者	出版年
ケース1	1. A study of the Yami language : an Indonesian language spoken on Botel Tobago Island 【資料種別】 図書	Erin Asai	Universiteitsboekhandel en Antiquariaat	1936
	2. ヤミ語に関する民俗誌ノート (紅島嶼研究: 土俗編) Ethnological notes on Yami 【資料種別】 自筆ノート	浅井 恵倫		
	3. 台湾ヤミ族、涼台 (タガカル) 前に立つ男女と浅井恵倫教授 【資料種別】 写真			
ケース2	4. 紅頭嶼土人の暦組織 (台湾総督府博物館創立三十年記念論文集) 【資料種別】 論文別刷	浅井 恵倫	台湾博物館協会 (台湾総督府博物館内)	1939
	5. Sedeq単語リスト及びテキスト Sedeq wordlist and texts 【資料種別】 自筆ノート	浅井 恵倫		
	6. 糸を燃る原住民女性と犬 (霧社地区のタイヤル族かセデック族) 【資料種別】 写真			
ケース3	7. The Sedik language of Formosa 【資料種別】 図書	Erin Asai	Cercle Linguistique de Kanazawa, Kanazawa University,	1953
	8. セデック方言に関する比較単語リスト Comparative wordlist of four Seediq dialects 【資料種別】 自筆ノート	浅井 恵倫		
	9. 浅井恵倫教授と原住民男性達 (タイヤル族かセデック族) 【資料種別】 写真			
ケース4	10. 自筆カード束 (サアロア語) 【資料種別】 自筆カード	浅井 恵倫		
	11. 原語による臺灣高砂族傳説集 The myths and traditions of the Formosan native tribes : texts and notes 【資料種別】 図書	臺北帝國大学言語學研究室編	刀江書院	1935
	12. 粟束を担ぐ原住民男性 (パイワン族) 【資料種別】 写真			
ケース5	13. Saturai 1, 2 (バサイ語歌謡のレコード) 【資料種別】 レコード	臺灣臺北州宜蘭郡社頭 呉林氏 伊排	臺北帝國大学言語學研究室, 土俗人種學研究室	
	14. 平埔蕃 = Basai (基隆郡新社の単語資料) Vocabulary data collected in Shinsha (Xinshe), Kiryu (Jilong) 【資料種別】 自筆ノート	浅井 恵倫		
	15. 荷を頭に担ぐ女性 【資料種別】 写真			
	16. 一服する平埔族の女性 【資料種別】 写真			
ケース6	17. 台湾平埔族諸語比較語彙 : 第1部 台湾中西部諸語 (語學文學論文集) 【資料種別】 図書	土田 滋	東京大学文学部	1982
	18. 臺灣・平埔族の言語資料の整理と分析 Linguistic materials of the Formosan Sinicized populations I: Siraya and Basai 【資料種別】 図書	土田 滋 [ほか]	東京大学文学部	1991
	19. Texts of the Trobiawan dialect of Basai (巴賽族社頭方言傳説歌謠集) 【資料種別】 図書	Paul Jen-kuei Li ; with the assistance of Hsiu-min Huang & Dorinda Tsai-hsiu Liu	Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies	2014
	20. 手を繋いで踊る、漢族風の上衣を着た男女 (平埔族) 【資料種別】 写真			
ケース7	21. 台湾言語学はどこまで進んだか? Contributions of Japanese linguistics to the study of the Indonesian languages of Formosa 【資料種別】 論文別刷	浅井 恵倫		1954
	22. 台湾蕃族は何処から来たか (昭和5年11月5日 大阪毎日新聞社に於いて講演) 【資料種別】 自筆講演原稿			
	23. 和装の浅井恵倫教授と犬 【資料種別】 写真			